

研修テーマ

「評価」で創る主体的な学習 —自ら表現する子どもを育てる評価と支援を考える—

話題提供主題 **自分の考えをもち、友だちと高め合う授業の工夫**

長門市立仙崎小学校 重枝 孝明先生

実践について

第6学年算数科『ぼくは名探偵 探偵アイテム』『単位量あたりの大きさ』の学習から

1 指導過程について（重枝先生より）

この単元では、一次・四次を一斉 TT 指導で行い、二次・三次を習熟度別に2コースに分かれ、授業が行った。担当したコースは、学習で細かな支援を要する子どもたちである。学習内容をしっかり理解して、進んで自分の思いや考えを表現し、苦手意識を持っている算数に楽しく授業に参加できるよう、以下のような工夫をした。

① 自分の考えや思いをもつ手だての工夫

自分の考えや思いを進んで表現できるようになるために、子どもたちが学習に見通しを持つことが大切であると考え、単元全体にストーリーのある単元構成にした。毎回、6年生に依頼書が送られ、その問題を解き、報告書を作成していくという活動である。そして、その解き方をアイテムとしてもち、新しく依頼される問題に活用しながら解いていく。報告書にも「単位量あたり」の単元で大切な言葉を活用してまとめている。

② 自分の考えや思いを交流して、高め合う手だての工夫

単元を通して3人グループを作り、話し合いや教え合いを行った。その前にまず一人で問題を解く時間を保障する。そして、3人グループになり、よりよい方法を話し合い、全体で話し合いしてよりよい方法を考えまとめる活動である。

③ 活用する手だての工夫

問題の内容は、なるべく身近な問題を取り上げ、生活のいろいろな場面で用いられていることに気づき、この考え方のよさを実感するようにした。そして、興味をもって問題を解いていくことができるように生活に生かしていくようにした。



2 協議

- ・ なぜ、3人のグループなのか？3人で行うことにより、一人ひとりの考えが反映されるのか。
- ・ 3人グループで行うことは、分からない子どもに教えることができる場合と自分の考えを一人ひとりがもち、よりよい考えを話し合う場合があるが、本時では？一人学びで、子どもたちは全員何らかの考えを書いていたのか。（→この時間は、みんな考えをもち話し合っていた。）
- ・ グループ学習でよいことは、分度器の使い方など子ども同士で分かりやすい言葉かけで教え合うことがあった。学習内容によるが、グループ学習が有効で、隣の子どもの声かけが励みになることがある。

なぜ、3人なのか、高学年では珍しい人数である。担任としては、何かを決定するときに必要際上限の人数と考え、また教え合う関係も作られる人数であるとの答えである。

これは、学級の実態と個の考えを活性化させる一つの工夫であると思う。この3人グループで学級全体が主体的な学びが構成され、活性化されればよい。

今後の子どもの様子を知りたい協議であった。

- ・ 一人学びからグループ学習へ行くときの教師の見極めは？

これは、本研修会のテーマに大きく関わることである。

授業を進めるとき、例えば一人学びからグループ学習に移る際に、子どもがそれなりの意味がわかってないと、教師の都合で授業が展開されることになる。「では、次に行きます。」「さあ、今度は・・・」などの言葉が代表される。

次の活動に移行する時の見極めは、主体的な学びの構想の重要な観点である。その見極めの一つに子どものつぶやきや発言を意識しておくことである。当然、授業の脈絡は、指導案を作る時に考えられることであるが、リアルタイムに授業を進める時は、子どものつぶやきや発言から思考の流れを把握することが唯一の方法であろう。ここに評価で創る主体的な学びの結節点がある。

- ・ 子どもたちがもっと、意見を交流するための評価や具体的な手だては？
- ・ 割合の学習でも、なかなか学習内容が理解できず、話し合うというよりも、教え込んでいる。子ども主体の授業になっていなかった。
- ・ 子どもの分かったと感じるつぶやきがいい。



- ・ 燃費を求める問題であるが、教科書に載っている最小公倍数で考える考えはでにくい。
- ・ 報告書の書き方がパターン化されているので、子どもたちも見通しをもって、学習したことをまとめることができた。学習のパターン化は、支援を要する子どもたちにとって大切な指導方法でもあるのではないか。

主体的な学習のために単元全体をストーリーとして扱うことは、子どもの側で授業を創る際の一つの方法である。それは、問題解決の学習過程である問題発見の過程・問題追求の課程・表現の過程とも考えられる。単元全体のストーリー化が、指導計画に明確に見えるとよかった。

依頼書を受け、報告書にまとめるという活動を毎時間繰り返せば、子どもたちには見通しがもて、次時の依頼が待ち遠しくなることも事実であろう。配慮を要する子どもや算数を苦手に行っている子どもにとっても、算数科の壁は多分低くなったと想像できる。そのあたりの個の実態も欲しいところである。

単元全体のストーリー化と毎時間の学習パターン化の関係を互いにもっと研究すべきだと強く思う。重枝先生からいい話題を提供していただいた。

3 最後に前・附属山口小学校で算数科を研究教科にされていた伊藤幹哲先生より指導をいただいた。

- ・ 3人グループの話し合い活動や一人学びからグループ学習に移る教師の支援について

一人学びからグループ学習、そして全体学習をして、終わりというパターンの授業が多いけど、留意する点がある。

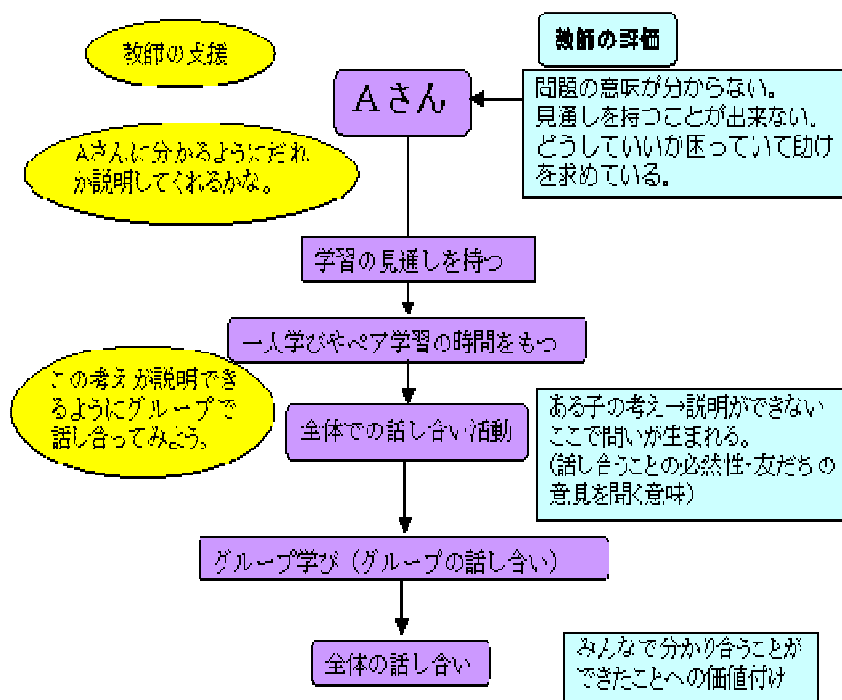
子どもたちが安心して意見を交流するのに、少人数で話し合うのは効果的であるが、3人の意見をまとめていく中で、一人ひとりの考えが全体に反映されるかどうか。

少数意見は、大変貴重な大切な考えである。教師が子どもの学びの枠組みを決めていくことも必要なときもあるが、子ども同士で、学び合い高め合うための学習活動になるようにしたい。

子どもたちが一人学びをする前に、まず、全員に答えの予想を聞いて挙手させてみる。その中で予想ができないAさんがいたとする。その子



が分かるような手だてを考えながら授業を仕組んでいく。



なかなか学習を理解することが難しいAさんを中心にした授業で、みんなで分かり合いみんなで解決しようとする授業への姿勢が育まれていく。今、支援を要する子どもたちが多く中、その子どもたちが、仲間とのよりよいかかわりにより、いきいきと分かる喜びを味わう授業が必要となっている。そのために、教師が子どもたちを見取り、評価と支援を大切にした授業改善をしていく必要がある。

4 おわりに

伊藤先生が、なかなか学習を理解することが難しいAさんを中心にした授業づくりの重要性を指摘していただいた。これまでも、全員が理解できる授業をめざしてきたはずであるが、本当にそうかと改めて問われると自信がない。

現在、支援を要する子どもたち、困り感の強い子どもたちが通常学級の中にいる。誰もが「わかる」「できる」授業、ユニバーサルデザイン化をめざすことが重要であろう。子どもの学びを創る会でも、特別支援教育の知見を活かした授業、ユニバーサルデザイン (UD) 授業を今後研修していきたいと考えている。